

史料翻刻

【念佛寺文書】 23号

(表紙)

「 安永七戌年二月

当社御修覆ニ付従当務被申渡候一件

念佛寺覚書扣

当職兼官 片岡左衛門尉

兼官代 西主馬

被申達候儀有之候間、只今御当職江

可被罷出候、已上

二月二日

片岡左衛門尉

念佛寺

右之通、二日四ツ半過申来ル、当住耳不通故、仍而即刻

代僧罷出候処、西主馬殿罷出被申聞候事

今般御普請ニ付、従奉行被仰渡候事、朝六ツ半ト九ツト七ツト

右三時刻限知らせのため、鐘為撞候様、被仰付候故、正福寺江

申渡シ候所、無人ニ御座候へハ、御請取申候而も寺役ニ罷出候節杯ハ

間違候而者、氣之毒ニ奉存候間、御免被下度由被申候故、

然者、寺役之節者、念佛寺江被申候而、あの方方撞ニ被参候様ニ

可申候間、申合セ頼申由ニ而御座候、右之趣代僧罷帰リ書付見セ候故、

直ニ御当職江使僧遣ス、口上右之段被申聞、承知御尤奉存候、
乍去、御太切之御用ニ御座候へ者、愚寺ニ而も無人毎度寺用ニ付、
不残他行仕候義有之候へ者、得御請不申御断申上候段、口上ニ而

申入候処、

又候、主馬殿被罷出、成程此方方も諸方之難儀成不申様ニ

取成申候へ共、聞入無之、正福寺方も段々の断故、奉行江申候

得共承知無之、尤御不勝御請可被成候時刻者、山上之

貝をうつし、鐘つき候事ニ御座候、此上御断被仰候へハ、

以書付を被仰ねば成不申候、其時者此方よりも

奉行江直ニ、右之断を申さねば成不申、左様候而者、

又々正明寺役所江も、御出被成候様ニ成申候而者、氣之

毒ニ存候間、乍御不勝御請可被成候、是非御請無之時ハ、

正明寺役所ニ而被申付候得者、御請被成候ハねば成不申、

其時者、当職之手寄も宜からず候間、是非御請可被成候、

御請被成候へハ、及御返事ニ不申候との御事、尤今日中ニ返答

仕候様被申候由、代僧口上書如件

右之趣ニ付、即刻別紙半切紙ニ而相認メ差出ス事

口上

今日、依テ御召状ニ、即刻代僧差出シ候処、今般

御当社御普請中者(明六ツ半/午刻/申刻)右三時之刻限を為相

知候様ニ、従御奉行所、被仰渡候付、正福寺江被申付候所、

無人故、御請申候而も、寺役ニ罷出候節杯ハ、間違候而も

氣の毒ニ被存、右御断被申上候付、正福寺寺役之節ハ

從愚寺人を出シ、鐘為撞候様ニ申合セ、為相勤候様ニト
御頼之趣、御叮嚀之御口上、御尤ニ奉承知候、併愚寺ニ而も
無人、殊ニ寺用ニ付、無抛不残他行仕候儀、度々の事ニ
御座候へハ、右御免之御願申上候処、又候、是非ニ御請申候
様ニ、押而被仰聞候由、此上可及御断ニ存念ニ候ハ、以書付を
御断申上候様ニト、被仰渡候由、扱又不承知之時ハ、正明寺
役所ニ而可被申付との御事、此段乍憚不能愚案候、
何分右之一件者、御太切之御儀ニ奉存候へハ、御賢察
御高免被成下候様ニ御取成、被仰上可被下候、為右御断之
以書付、言上仕候、已上

二月二日

念佛寺

御当職御役人中

猶、乍憚申上候、拙寺直參可仕所、病身故、耳一向不通、
乍自油、又々以代僧如斯ニ御座候、以上
左候へハ、可様之書付ハ、奉行所江者不被差出候故、
先戻シ申候、可様ニ事々敷被仰候儀ニ而者無御座候、
随分正福寺ニ者致承知被居候、只七ツ之所寺役多ク
有之断之事、右之趣故、口上ニ而又候申遣シ候事、
御太切之御用故、何分得承知不仕候旨申含メ候所、暮ニ
および、役人も引被申候間、明日被罷出候との事
三日朝飯後、早々代僧罷出候処、彼是長文言者入不申、
唯断之一通り書付、印形相認メ差出シ候様ニ、被申渡候付、
則、別紙本書之通相認メ差出シ候へ者、只今兼官者

奉行所江被參、主馬ニも他行之事ニ候へ者、書付差置
被歸候様ニと取次之仁被申候而、尤用事有之者、從
此方可申遣スとの事

別紙本書之写

乍恐口上書

今般

御当社御普請中者、刻限難相知レニ付、(明六ツ半/午刻/申刻)

右三時鐘為撞候様ニ、從

御奉行所、被 仰渡候付、正福寺之鐘を

(貼紙)

「撞候様ニ、正福寺江被仰付候処、於正福寺ニ奉畏、右三時之

鐘撞申候、然ル処、正福寺義無人、若寺役等御座候節ハ、

漸寺内ニ小僧老人残置候ニ付、何とそ其時ハ御用捨被下候

様ニと申上候付、当寺向イの事ニ候へハ、正福寺ニ寺役等有之節ハ

正福寺方為知可申間、七ツの鐘撞申候様ニと被仰付候へ共」

(貼紙下の本文)「右之時刻ニ撞候様ニ、御当務方被仰付候処、正福寺

無人故、寺役之節杯ハ間違候而者氣の毒ニ被存、御断被

申上候由、依之、正福寺寺役之節者、当寺方人を出シ

正福寺之鐘を為撞候様ニ、被仰聞候へ共」愚寺ニ而も無人

之事、殊ニ数度寺用ニ付、不残他行仕、右之時節ハ

間ニ合不申時者、御太切之御用相背候御事、恐入

御断○奉申上候、以上

○(貼紙)「申上候処、正福寺ニ寺役有之時斗七ツ鐘撞候儀、稀成事ニ

候間右之段、承知仕候様ニと再三被仰渡候へ共、何分御断申上候、已上

二月三日(貼紙)「右、はり紙之分ハ当職より之加筆ニて候事」念佛寺印
御当職

御役人中

然ル所、同九ツ半時、当職方御使者一寸参り候様との事、折節寺役ニ罷出、留主中故、罷帰り其段承知、直ニ当職江代僧出シ候所、右差出シ置候書付ニ加筆して此通り相認メ差出シ候様ニと被仰渡候由、寺用相続暮方ニ帰寺、依之四日早朝書付差出ス、文言写

乍恐口上書 但シ本紙にて

今般

御当社御普請中者、刻限難相知レニ付、(明六ツ半ノ午刻ノ申刻)右三時之鐘為撞候様ニと、從 御奉行所、被仰渡候付、正福寺へ右之刻限ニ鐘を撞候様ニ被仰付、御請被申候由、併正福寺茂無人故、若寺役之節杯者、間違有之候而ハ氣の毒ニ被存、御断被申上候付、右正福寺ニ指合有之節者近寺之事故、当寺方人を出シ相勤候様ニ被仰聞候得共、愚寺共ニ無人之事、殊ニ數度無抛不残他出仕候へハ、自間ニ合不申時者、御太切之御用相背申候御儀、甚夕恐多く、右御断奉申上候、何分御免被成下候様ニ御取成被為仰上可被下候、已上

二月四日

御当職御役人中

追而申上候 則半切紙ニ而書添出ス

昨日御加筆被成下候へ共、折節寺役ニ罷出、夕方帰寺仕候故、御答も及延引候段、勿論御細書之趣者御尤ニ奉承知候、併是以御高免奉願候本書ニ相認メ候通、右御太切之御修覆ニ付、関東方も御役人、并京都町御奉行所其外諸役人中御出勤之時計之鐘故、寺用多キ拙寺之儀、何分恐入御断申上候、乍自油、別而此節寺役繁多取紛、文略御用捨可被成下候、以上

二月四日

御役人中様

念佛寺

右之通両通差出シ候所、相者当職役所江持参之上、左候へハ加筆之段不承知かと被相尋候所、代僧愚力故、其段罷帰り相尋可申との返答にて致帰寺、其段申伸候故、押返シ代僧又々遣シ候、何分多用之節ニ御座候へハ、何事も御用捨願申候趣申達シ候へハ、兼官も引被申候間、追而可申入、若用事有之者、此方方可申遣スとの相者返答にて候事、 十日迄無沙汰

右差出シ候式通之書付共、

当職ニ留り有之候事

然ル処、十一日ニ当寺檀中之内、小寺喜六河原崎澗治

右兩人、当職江被召、別紙之趣被申渡候よし、

依之、当寺江書付を以、被申越候事

御当職御意之趣、右兩人方書付之写

今朝五つ時、念佛寺旦那小寺喜六河原崎澗治

兩人罷出候様ニ、御当職方御差紙ニ付、則兩人、

右日限ニ罷出候処、檢校御直ニ御逢被成候上、

右兩人江被仰渡候趣、左之通

今般御修復御用ニ付、諸御役人中御出勤并御退出

御知らせのため、先達而、正福寺江三時之刻限ニ鐘を

つき候様ニ被仰渡候処、承知畏罷在候所、寺役も御座候

折柄者罷出、よふか小僧老人相残り罷在候ニ付、

御太切之御用間違候儀、氣の毒ニ被存、此段御当務江

御断、正福寺より申上候、仍之、向寺之御事故、

右寺役ニ付、罷出候時節はかり、念佛寺方人を出シ

正福寺之鐘をつかせ候様ニと申聞候処、無人ニ付断之趣、

念佛寺方申出候付、猶又再三利害を以申聞候へ共、

兎や角と利害を付ヶ断ニ付、不得止事を断之

文面ニ加筆致し遣シ、右之趣を以被相願候様に

申聞候得共、是とても一向不相調、只ひら断之趣、

理不尽之致方と被存候、畢竟右三時之

為知之鐘を御社頭御修復御用ニ付而之義ニ候

得者、難有承知も可仕之処、右之通、我情之振廻イ

甚夕以難相濟候故、急度申附方も可有事ニ候

得共、憐愍を以、今日兩人召出シ、一応申聞候儀候へハ、

旦那者寺ニ登りてハ不憚儀ニ存候間、此段念佛寺江

逐一被申聞候様、為可申入、今日兩人召出シ候事

勿論先達而外用ニ付、当職江念佛寺被罷

出候節茂、我情之趣有之様ニ存候事も候へ者、

平日とても我情申事ニ有之候哉、何分此等之儀

得与為且中と、委敷被申聞候上、不相用、やはり

我情之儀ニ候へ者、不得止事を是よりも申附方

有之候ニ付、此旨申聞候義ニ候間、念佛寺江被申越

何連と成共、返答可申出由、今日御当職御直ニ

被仰渡候付、此段御自分積御了簡之程承

度存候所、御耳もきこへかね候ニ付、有増書付、得御意候

○前条之通、御当務方被仰渡候義ニ候へ者、御請被成候上、

七ツ之鐘のミの儀ニ候へハ、神妙ニ御つかせ被成候様致

度候、ことに正福寺寺役ニ而被罷出候時ばかりの

儀ニも候得者、猶更之儀ニ御座候、若又御承知無之

時者、且家中打寄、又もや強而御自分積江得御

意候様ニ相成候而者、重高かさたかニも相成り、氣之毒ニ

存候付、先々此段兩人方得御意候得者、是非むづかニ不濤

御請被成候儀、御如法と存候、殊ニ御当職之被仰

渡候儀ニ候へ者、何分ニも御請被成候義、可然存候事

二月十一日

河原崎澗次郎

小寺喜六郎

念佛寺様

御覽之跡者、此方へ御戻し可被成候

折節相続寺役繁多ニ付、漸々十四日八ツ過、右兩家江

為右返答之參り、口上之趣、右一件ニ付、従当職御意と

御座候而、御書付被下拜見仕候、拙僧何分不承知之

趣者、先達而御当職江、以書付を申上候通、御太切之

御儀ニ奉存候故、御請申候而も、若間違等御座候而者

拙寺者愚力御当職御役人中之御如在之様ニ相成候而ハ

氣之毒ニ存、御断申上候義ニ御座候、然ル所、御当職二者

唯当務方申付候儀を違背仕候事、不埒我情之

至り理不尽との御意、則前書之通ニ有之候事

○併寺法茂有之事、御朱印地、旁以寺号ニ

相係り候儀者、難替身命ニ奉存候、此上不承知之

段被申上候ハ、尚以強ク御呵も可有之と察入候、

其段拙僧耳不通ニ付、委ク御書付可被下候、

品ニより、京都迄も可及沙汰ニ哉と存居候事、

拙僧寺用有之ニ付、早々帰寺仕候事、暮方前

同夕初夜時ニ河原崎方弟子共を呼ニ来り、直ニ參候処、

所々且家中江、右兩人方廻文出シ被申候ニ付、

認メ来ル写

去ル十一日、念佛寺為且中、御当職江被召出、被

仰聞候義ニ付、為御披露御相談申度義御座候間、

今十五日暮時、早々右念佛寺江御参会待入候、

尤、無抛用談ニ候間、無間違御参会待入候、已上

小寺喜六郎

河原崎澗次郎

二月十五日

次第不同

鹿野兵部殿

鹿野権之介殿

鹿野権右衛門殿

鹿野甚兵衛殿

能村主計殿

林 要人殿

林 伊右衛門殿

大森与助殿

藤森線柳殿

鍵屋孫兵衛殿

醬油屋市兵衛殿

木屋庄右衛門殿

木屋重兵衛殿

奥之町忠兵衛殿

東山路次郎兵衛殿

梨木忠兵衛殿

檀所町庄兵衛殿

同 与兵衛殿

別紙二

智善寺江会谈之手紙来ル

右会合之上、小寺氏河原崎氏兩人より

右一件、当職御意之趣一通り御咄シ有之上、

拙僧罷出、二月二日之従差紙次第之有様、

并別紙書付共、不殘惣且中江読聞セ、勿論

当職御直ニ御意之趣と申書付共読終テ、

御兩所江昨日方得御意候通、分ケテ申者愚力、従

御当職、被 仰聞候儀違背仕者、愚寺甚々不埒

乍去、今般之儀者

公儀御用筋格別之御事故、再三被仰聞候へ共、

及御断ニ申候、乍憚意味違イ之段、御当職役人中迄

被 仰上、何卒穩ニ御聞濟被成下候様ニ、御願可被下候趣、

右之通、別而御兩人江申伸、拙僧者勝手江引候事、

然ハ、暫クして、右会合之惣且中江拙僧江、以書

付を被申候事、何分先々御請可被下候、猶又深キ

思召ニ而も御座候ハ、為御聞被下度候、何分御聞入

無御座候而者、殊外混乱仕候間、無御遠慮御申

被下度、且中ニも寺混乱仕候而者、且中難儀存候、

○拙僧外ニ少シ茂存念無之、最初より御断之

心底者前段のことく、又暫ク有而、御兩人方

左候ハ、右之通、先々御断可申上との事

○拙僧存念之通、惣中御聞入忝、何分御兩人方宜

被為 仰上、御聞濟被成下候様ニ、御願イ頼入候、

右之通ニ而惣中被帰、社士中五人御残り、又候

被申聞候事、右兩人方被申候者、被仰聞候通を

当職江申上、其上住持者耳不通、代僧聞違イ

多ク有之、替僧ハ病身、其外小僧共ばかりにて

御太切之御用故、恐入申候と可申上との事故、又々

拙僧罷出、寺内之人数、善悪ハ必御申上御無用ニ存候、

当寺方可相勤答之儀ニ御座候へハ、無人之時者、

御普請中、人を召抱候而成共、可相勤事ニ候へ共、

何分間違之處恐多ク、右之仕合御座候段申入候、

然者、其段差扣可申との事ニ而、追付不殘退出之事

一十六日七ツ過、右兩人御出先刻方御当職江参り

漸唯今罷帰り候、夜前御自分積被仰聞候趣を

御当職江委敷申上候処、檢校直ニ御逢被成候上、

兩人江被仰渡候趣者、今日兩人返答之趣且家

連判之上、口上書ニ而可申出旨、被仰渡候ニ付、

今晚夜前参会之衆中はかり寄合之うへ

口上書相認メ、連判いたし、差出シ候つもりニ御□□、

右ニ付、昨十五日廻状之連中江、兩人方口上書被相認、

早々相廻シ候事、右会谈之上、連判相調候而、御兩人方江

為持遣シ候、定而十七日ニ当職江差出シ可被申候事

其後有無之沙汰も無之事

右旦那惣中^方差出ス口上書写

口上之覚

去ル十一日、念佛寺旦那小寺喜六河原崎泐次郎兩人
被召出、被為 仰渡候儀

一今般御修復御用ニ付、諸御役人中御出勤并

御退出御知らせのため、先達而、正福寺江三時之刻限ニ

鐘をつき候様ニ、被為仰渡候ニ付、寺役も御座候、

折柄七ツ鐘、念佛寺向イ寺之事故、人を出シ鐘を

つき候様ニ被 仰渡候処、念佛寺再応御断被

申上候付、且中として得与申入候様、被 仰渡候趣

奉畏、則兩人方再応被申聞候上、惣中打寄逐

一二申達シ候処、念佛寺被申候二者、此度之御修復

御太切之御用、当寺無人之事故、殊ニ不残寺役ニ付、

他行も仕候故、間違申候而者甚々恐多ク奉存候付、

御断奉申上候、全ク我情御請不申儀ニ而者

且以無御座候、自分耳不自油^{みづ}ニ而、御太切之

御用ニ付、何分恐入御断申上候而已、達而

申候而御憐愍之上、御聞濟可被成下候様、奉願と

被申候故、檀中如何とも致方無御座候ニ付、

右念佛寺被申候通、言上仕候、以上

念佛寺旦那惣代

安永七戌年二月

御当職様

御役人中

旦那所丁与兵衛印

同 庄兵衛印

山路丁忠兵衛印

同 次郎兵衛印

同 市兵衛印

同 庄右衛門印

奥丁 忠兵衛印

柴座丁重兵衛印

藤森線柳印

大森与介印

林 要人印

林 伊右衛門印

能村主計印

鹿野権右衛門印

同 甚兵衛印

同 権之介印

同 兵部印

河原崎泐次郎印

小寺喜六郎印

【念仏寺文書】 35号

(表紙)

「卯十一月

口達書」

諸国寺院ニ有之候梵鐘之儀、本寺并古来之

名器、当節町々鐘ニ相用候分相除、其余者不殘

大砲小銃ニ可鑄換旨、先達而叡慮を以被

仰出候、一体梵鐘之儀者、其寺之法器ニ候得者、

容易之御沙汰可有之品ニ無之候得共、近来

諸夷引続入津致し、武備守要之御時節、大砲

小銃ニ茂急務之品ニ而、御国備御堅固被成置度、

各別之

叡慮茂有之被

仰出候事ニ候条、寺院者勿論大小檀越寄進之

輩ニ至迄、厚御趣意之程相弁、法用之儀者在来

之半鐘又者盤木大鼓等相用、本寺并名器

当節相用候時之鐘之外、撞鐘之分者一同

公儀江可差上候、勿論万石以上領内之分者、其

所々領主江被下領主ニ而鑄換、万石以下知行并

御代官領主地頭江附屬無之寺院、其寺社

領之分と茂御料所ノ寺院一同

公儀ニおひて鑄換被

仰付候間、御府内者寺社奉行御代官御預所

領主ニ而、寺院本末并梵鐘有無、名器時之鐘之

訳等糺之上、取斗尤時宜ニ寄檀家惣代のもの

呼出候儀茂可有之候

一万石以下知行之分茂、自分ニ而鑄換之儀相願

候ハ、其通りニ茂可被

仰付候間、早々頭書可差出候、

但自分ニ而鑄換被 仰付候得者

公儀ニ而者御構無之候間、万石以上之振合ニ

準し知行所寺院一手ニ取斗候儀茂可

心得候

右御書附江戸より到来候条、得其意当地者

勿論、他国ニ罷在候末寺末流ニ至迄、被

仰出候之趣、厚可相心得、尤梵鐘差出方之儀者、

追而可申渡間、可存之段夫々不洩様申渡候

卯十一月

(表紙)

「卯十一月

口達書」

口達書

諸国寺院ニ有之梵鐘之儀、本寺之分并古来之

名器時之鐘ニ相用候分相除、其余者大砲小銃ニ鑄換候儀ニ付今般再応被

仰出候通、梵鐘之儀者仏門之重器ニ付、尋常

之訳を以可被及御沙汰筋二者無之候得共、近来

異国船度々渡来、不容易時節ニ付格別之

叡慮茂有之、右体重キ法器を鑄換被

仰出候儀ニ付、此上難渋ケ間敷儀者勿論、非常用

等申立、歎願等いたし候而茂、御取用可相成筋二者

無之、万一心得違之輩茂有之候ハ、於奉行所ニ

吟味之上、嚴重ニ御沙汰可被及候条、御触之趣厚

相弁、末々寺院ニ至迄、心得違無之様可致候

一録所掛所其外末寺ニ無之候而茂本寺茂無之

一本立候類之大地者勿論其外と茂寺格之次第

可申立候

一御朱印之地之差別無之事

一塔中地中茂門末無之候得者末寺同様相心得神

社別当社僧茂同断之事

一御代官御預所領主地頭附属無之寺院并其

寺社領之寺院者、最寄次第其所之奉行所ニ而

取調候間、其旨相心得可申立候半

但本文御代官其外附属之寺院者、梵鐘有

無右御代官其外江申立候段可差出事

一寺院之内無住ニ而之分、留守居僧等ニ而難聞筋者、

其寺兼帯之本寺、亦者法類組合寺等より可申立事

右之通相心得、其余別紙安文之趣を以取調、

美濃紙帳面三通り相認、帰後

御役所江可差出事

卯十一月

【念仏寺文書】 24号

(表紙)

梵鐘之儀ニ付書附

御朱印地

京都浄土宗知恩院末

城州綴喜郡八幡壇所町

念佛寺

一梵鐘前々より無御座候

右之通相違無御座候

御朱印地

京都浄土宗知恩院末

城州綴喜郡八幡壇所町

念佛寺(印)

御奉行所

【念仏寺文書】 25号

(表紙)

「梵鐘之儀」二付書附

御朱印地

浄土宗本山京都知恩院末

城州綴喜郡八幡壇所町

念佛寺

一梵鐘前々より無御座候

一末寺十八ヶ寺有之左之通ニ御座候

御朱印地

城州綴喜郡八幡家田町

玉祥庵

御朱印地

城州綴喜郡八幡神原町

知善寺

御朱印地

同州同郡同所同町

世音庵

御朱印地

同州同郡同所森之町

奥之庵

御朱印地

同州同郡同所神原町

慶林庵

同州同郡同所生津村

東向寺

同州同郡同所川口村

放光寺

同州同郡同所山路町

了正庵

同州同郡同所橋本町

十念寺

同州同郡同所森之町

瑞光寺

同州同郡同所神原町

蓮華寺

同州同郡同所生津村

地藏院

右玉祥庵外十卷ヶ寺者別帳ニ奉差上候

同州同郡同所芝之町

俊榮庵

右者退轉仕尤梵鐘無無御座候ニ付別帳面不差上候

小堀勝太郎殿御代官所

同州同郡上奈良村

河阿弥陀寺

右者

天野高三郎殿知行所

同州同郡大住村

両讚寺

右者

曇華院御殿家領所

同州同郡同村

来迎寺

右者

大久保加賀守殿領分附屬

河州交野郡渚村

西雲寺

右者領主久保加賀守殿江書附差出申候

永井金三郎殿
永井録之助殿立会知行所

同州同郡塚本村

西光寺

右者

右之通相違無御座候、以上

御朱印地

浄土宗本山京都知恩院末

城州綴喜郡八幡壇所町

念佛寺(印)

安政二卯年十二月

御奉行所

【社士日記】 安政二年十二月十一日

諸寺院梵鐘被召上ニ付寸尺重サ銘写等委敷書記候而奉行所ニ差出候様触書
到来、右ハ異国船入津防禦之為大炮小銃ニ被鑄改候故也、但シ、万石以上
ハ領主江被下地頭ニ而鑄改候事、万石已下者奉行所或者代官所ニおいて被鑄
改候御触書也

『京都町触集成』第十二卷 安政二年、六〇六号

三

「海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘を以可鑄換大炮小銃」之

論錫鉛硝石等、何れも必備之品ニ付、右等ニ無之候も相濟

候品を右類ニ而相製し候儀、自今不相成事ニ候、且又梵鐘を

も鑄換被仰出候程之儀ニ付、銅鉄を以新規ニ仏像等鑄造致し

候儀難相成候、仏器之儀も木製又者陶器等ニ而も相濟候分ハ、

以來銅鉄類を以製造之儀可為無用候

右之通可被相触候

三月

御書付從江戸到来候条、洛中洛外江不洩様可相触もの也

卯五月

【正法寺文書】25・419 安政二年公儀御触之留

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵

鐘を以可鑄換大炮・小銃之旨被

仰出候、右者武備御充実之御趣意ニ候間、

其外銅鉄者勿論、錫鉛硝石等何れも

必備之品ニ付、右等ニ無之候も相濟候品を

右類ニ而相製し候儀、自今不相成事ニ候、

且亦梵鐘をも鑄換被 仰出候程之

ニ付、銅鉄を以新規ニ仏像等鑄造致候儀

難相成候、仏器之儀も木製又者陶器

等ニ而も相濟候分者、以來銅鉄を以製造

之儀可為無用候

右之通可被相触候

三月

右之通被 仰出候ニ付申触候、以上

五月廿九日 上野権大僧都

律家五ヶ寺

禅家五ヶ寺

正法寺

【若山要助日記】安政二年（京都市歴史資料館『叢書京都の史料』所収）

十一月廿日 晴

一、不用之梵鐘御取上之御触、御印付ニ而申参事、

十一月廿六日

一、其村々ニ在之候寺院社等も、左之廉書之通承度

候間不洩様入念取調、来ル廿七日迄ニ無間違書付

ヲ以拙宅へ返事可被致候、以上

惣本山 本寺 本寺並敷

無本寺 何寺末 何院

右之通取調、来ル廿七日迄ニ村役人印形持参罷越可

被下候、以上

右二付左之通書付差出し候事、

東本願寺末除地

一、浄土真宗

白蓮寺

一心寺末除地

一、浄土宗

正行寺

無本寺除地

一、時宗

藏春庵

同村正行院末

妙法院宮御領地

一、浄土宗

常光庵

右四ヶ寺之儀ハ往古より梵鐘并名器之類無御座候ニ付、
此度御断奉申上候、以上、

安政二卯年十一月

庄屋印

年寄印

『枚方市史』

第九卷

247頁

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘を以可鑄換大炮・小
銃之旨被仰出候、右者武備御充実之御趣意に候間、其外
銅鉄者勿論、錫鉛硝石等いれも必備之品ニ付、右
等ニ無之候^而も相濟候品を右類ニ而相製し候儀、自今不

相成事ニ候、且又梵鐘をも鑄換被仰出候程之儀ニ付、銅

鉄を以新規ニ仏像等鑄造致し候儀難相成候、仏器之儀も

木製又者陶器等ニ而も相濟候分ハ、以來銅鉄類を以製造

之儀可為無用候

右之通可被相触候

三月

右之通從江戸被仰下候条、云々

安政二卯年

對馬

三月

信濃

表紙解説

| | |
|-----|-------|
| | 1 2 3 |
| 5 | 4 |
| (裏) | (表) |

1. 西遊寺古文書調査の様子
2. 念佛寺門前（撮影：中井正寛）
3. 念佛寺古文書調査の様子
4. 安居橋から男山を望む（撮影：中井正寛）
5. 八幡清水井の路地田町（たまち）（撮影：中井正寛）



京都府立大学文化遺産叢書 第10集

石清水門前寺院・南山城地域の古文書

—京都府歴史資料の調査—

編集 竹中友里代（京都府立大学文学部特任講師）

東昇（京都府立大学文学部 准教授）

発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5

京都教区八幡組浄土宗青年会

発行日 2016年3月30日

印刷 双林株式会社

〒601-8106 京都市南区新千本通十条下ル
